

主要地方道出雲三刀屋線改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

はた の まえ い せき
畠 ノ 前 遺 跡



2006年1月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

主要地方道出雲三刀屋線改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

はた
畠 の まえ
ノ 前 遺 跡



島根県出雲市の位置

2006年1月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

序

近年、出雲市内では国道9号バイパス建設、国道431号バイパス建設、斐伊川放水路建設、新内藤川拡幅など大規模な開発事業が国や県によって進められています。特に、市内南部では、山陰自動車道が計画されており、事前の現地踏査によって数多くの遺跡が新たに発見されています。これら開発から文化財を保護するため、出雲市教育委員会では必要に応じて発掘調査を実施しているところでございます。

今回、発掘調査を行った畠ノ前遺跡も市内南部に位置し、島根県出雲土木建築事務所が計画する主要地方道出雲三刀屋線改良の予定地内であります。南部山間地は平野部と比較し、これまで発掘調査があまり実施されていなかったため、不明な点が多かったのですが、今回の調査で、畠ノ前遺跡が中世の山城であると同時に、古墳時代初頭から人が関与していたことなどが判明しました。

このような調査成果が、さらなるこの地域における歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いであります。

また、今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、最後になりましたが、発掘調査及び本書の発行にあたって、ご協力賜りました島根県出雲土木建築事務所をはじめ、関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成18年(2006)1月

出雲市教育委員会

教育長 黒目俊策

例　言

1. 本書は島根県出雲土木建築事務所の依頼を受けて、出雲市が平成 16 年(2004)年度に実施した、主要地方道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 本書で取り扱う遺跡は次のとおりである。
　　畑ノ前遺跡：島根県出雲市上島町 1994 番地 2 地
3. 現地の発掘調査は平成 16 年(2004)7 月 23 日に着手し、平成 16 年(2004)10 月 27 日に終了した。
4. 発掘調査及び本書の作成は以下の組織体制で行った。

　　発掘調査(平成 16 年度)

　　調査主体　出雲市教育委員会

　　調査指導　山根正明(島根県立大社高等学校教頭)

　　東森　晋(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)

　　事務局　板倉　優(出雲市文化企画部芸術文化振興課長)

　　川上　稔(同文化財室長)

　　調査員　三原一将(同副主任主事)

　　調査補助　伊藤晶子、宮崎　綾(同臨時職員)

　　報告書作成(平成 17 年度)

　　編集機関　出雲市教育委員会

　　事務局　神門　勉(出雲市文化観光部文化財課長)

　　川上　稔(同主査)

　　三原一将(同主任)

5. 本書の執筆・編集は三原が行った。

6. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナは L540mm × W340mm × H150mm、ビニール袋は L380mm × W260mm のものである。

7. 本書で使用した方位は座標北を示す。

8. 本書で使用した測地系は世界測地系(改正後)である。

9. 調査にあたり上島排水機場地元管理者の方々にお世話をになった。記して謝意を表しておきたい。

10. 発掘調査、遺物整理については、次の方々の協力を得た。

　　青木　孝、奥田利晃、勝部初子、川上靖夫、岸　邦夫、上代　勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、曾田利夫、高根常代、富田　勉、成相吉隆、藤原一男、古川八郎、吉川善美、米山清司(以上、発掘調査)、飯國陽子、永田節子(以上、遺物整理)

11. 遺物実測については、調査員、調査補助員が行った。

12. 本書で掲載した航空写真を除く写真的撮影は三原が行った。

13. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と環境 2

第3章 調査の結果

　　調査の概要 4

　　調査の成果 6

第4章 まとめ 18

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図 1 周辺の中世城館跡(1:100,000)-----	3	図 8 土坑 1 実測図(1:50)-----	14
図 2 調査位置図(1:2,000)-----	5	図 9 土坑 2 実測図(1:50)-----	14
図 3 掘削前地形測量図(1:300)-----	7～8	図10 土坑 3 実測図(1:40)-----	15
図 4 遺構配置図(1:300)-----	9～10	図11 土坑 4 実測図(1:50)-----	15
図 5 a2-B6-B16 ライン断面図(1:100)-----	11	図12 P1～P3 実測図(1:50)-----	16
図 6 尾根軸横断ライン断面図(1:100)-----	12	図13 出土遺物実測図(1:3)-----	17
図 7 堀切実測図(1:100・1:50)-----	13		

表 目 次

表 1 周辺の中世城館跡一覧-----	2	表 2 出土遺物観察表-----	17
---------------------	---	------------------	----

写真図版目次

図版 1-1 調査地全景(西から)		図版 8-1 土坑 2 調査状況(北西から)	
2 調査地全景(南東から)		2 土坑 2 完掘状況(北西から)	
図版 2-1 調査地全景(右が北)		図版 9-1 土坑 3 完掘状況(南東から)	
2 調査完了状況(右が北)		2 土坑 4 調査状況(北から)	
図版 3-1 調査完了状況(中央から南東を望む)		3 B13gr ピット完掘状況(南東から)	
2 調査完了状況(中央から北西を望む)		図版 10-1 B7-A7 ライン断面(北西から)	
図版 4-1 調査地全景(斐伊川から望む)		2 B9-C9 ライン断面(東から)	
2 仏経山(調査地から望む)		3 B11-C12 ライン断面(南東から)	
図版 5-1 堀切断面(東から)		図版 11-1 13-1 出土状況(北から)	
2 堀切断面(西から)		2 13-7・13-8 出土状況(東から)	
図版 6-1 土坑 1 調査状況(西から)		図版 12-1 出土遺物(13-1)	
2 土坑 1 完掘状況(北西から)		2 出土遺物(13-2～13-8)	
図版 7-1 調査前状況(中央から南東を望む)			
2 調査前状況(中央から北西を望む)			

第1章 調査に至る経緯

島根県出雲土木建築事務所が計画する主要地方道出雲三刀屋線改良事業予定地内には、周知の遺跡である畠ノ前遺跡が存在していた。この畠ノ前遺跡は山陰自動車道の工事の前段に、島根県教育委員会による現地踏査で新発見された遺跡であり、平成13年度には周辺で試掘調査が行われている。

また、平成14年度には今回の調査地の隣接地で島根県教育委員会によって本調査も実施され、建物跡、落とし穴などの遺構のほか、磨製石斧や黒曜石製のスクレイパー、須恵器蓋などが出土している。

今回の調査地は、山陰自動車道と出雲三刀屋線が立体交差する箇所となる丘陵の南側工事区内が対象であった。平成16年度(2004)4月1日付で島根県出雲土木建築事務所から試掘調査の依頼を受けた出雲市文化財室は、同年4月20日にこの工事区内で発掘調査が必要となる範囲を特定するために試掘調査を実施した。その結果、工事区7,400m²のうち尾根上の1,200m²について発掘調査が必要であることが判明した。

この結果をもとに、出雲市と島根県出雲土木建築事務所は発掘調査を実施するため平成16年(2004)7月1日付で同年10月31日までの受託契約を締結し、調査費については島根県出雲土木建築事務所が負担することとなった。その後、上島排水機場から調査地への進入路を確保するなどの準備を経て、同年7月23日から10月27日までの約3ヶ月間にわたり現地発掘調査を実施した。また、10月30日に現地説明会を開催したところ約30名の参加者が集まった。

なお、文化財保護法等に基づく主な文書などについては、下記のとおり提出された。

平成16年(2004)6月4日 「埋蔵文化財発掘の通知について」島根県出雲土木建築事務所から出雲市教育委員会へ

平成16年(2004)7月1日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成16年(2004)10月29日 「(主)出雲三刀屋線緊急地方道路(改良)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報の提出について(報告)」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成16年(2004)10月29日 「(主)出雲三刀屋線緊急地方道路(改良)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて(協議)」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成16年(2004)10月29日 「遺跡の取り扱いについて(回答)」島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ

平成16年(2004)11月1日 「(主)出雲三刀屋線地方道交付金(改良)事業に係る埋蔵文化財発掘調査の畠ノ前遺跡の取り扱いについて(通知)」出雲市教育委員会から島根県出雲土木建築事務所へ

平成16年(2004)11月4日 「埋蔵文化財保管証の提出について」出雲市教育委員会から島根県教育委員会へ

平成16年(2004)11月4日 「埋蔵文化財発見届の提出について」出雲市教育委員会から出雲警察署へ

平成16年(2004)11月8日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について(通知)」島根県教育委員会から出雲市教育委員会へ

第2章 位置と環境

島根半島と中国山地の間に広がる出雲平野は、斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された平野である。出雲平野及び周辺には沖積作用が始まった縄文時代の遺跡も点在するが、本格的に人々の進出が認められるのは、弥生時代中期以降であり、現在では、年々市街地化が進んでいる。

一方、今回の調査対象となった畠ノ前遺跡は、この市街地の中心から南東約6km離れた山間地にあたる。斐伊川左岸にせり出した丘陵の尾根上(標高54m～62m)に位置しており、現地に身を置くと、北東方向に「出雲國風土記」に「神名火山」として記載されている、仏経山山頂を仰ぎ見ることができ、斐伊川の眺望も良い。

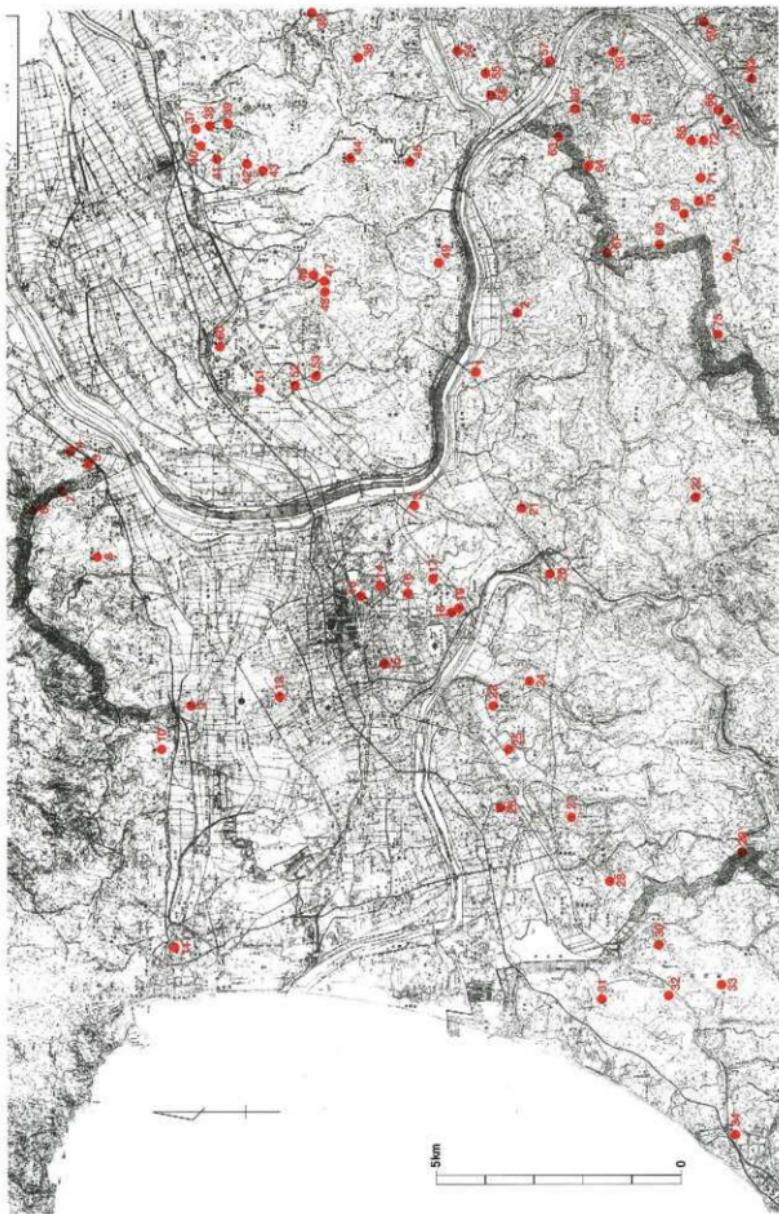
畠ノ前遺跡の所在は出雲市上津地区の上島町内であるが、稗原地区の船津町との境間際である。この上津地区から稗原地区にかけては昔原横穴墓群、火守神社南遺跡、宇那手塚山古墳、鐘築遺跡、上之郷城跡など古墳時代から中世にかけての遺跡が点在しているが、詳細が明らかな遺跡は少ない。

調査の結果、畠ノ前遺跡は主に中世に山城として機能していたようであるが、周辺には中世の城館跡として、上之郷城跡、瀧谷山城跡、立栗山城跡などが点在している。

1	畠ノ前遺跡	21	唐墨城跡	41	錦田原城跡	61	宮谷上城跡
2	上之郷城跡	22	戸倉城跡	42	鷹の巣城跡	62	三谷城砦群
3	瀧谷山城跡	23	浄土寺山城跡	43	宇屋谷城跡	63	伊萱城跡
4	美談土居跡	24	栗栖城跡	44	高瀬城跡	64	古山城跡
5	殿山城跡	25	布智城跡	45	城平山城跡	65	元屋敷城跡
6	旅伏城跡	26	智伊城跡	46	結城跡	66	伝藏前館跡
7	堀切城跡	27	高城跡	47	祇園城跡	67	竹ノ内城跡
8	鳶ヶ巣城跡	28	神西城跡	48	祇園狼山城跡	68	古以後城跡
9	岡田城跡	29	ニツ丸城跡	49	立栗山城跡	69	鎌撞堂城跡
10	蛇山城跡	30	高丸城跡	50	猿山城跡	70	大谷城跡
11	鹿藏山城跡	31	日出城跡	51	亀山城跡	71	三刀屋じや山城跡
12	三木氏館跡	32	姉谷城跡	52	神守城跡	72	中山城跡
13	平家丸城跡	33	要害山城跡	53	城山城跡	73	三刀屋尾崎城跡
14	向山城跡	34	平畠城跡	54	土居城跡	74	向屋敷城跡
15	淨音寺境内館跡	35	伊志見谷城跡	55	大茶臼山城跡	75	高城跡
16	塙治神社境内遺跡	36	岩倉大谷山城跡	56	岡ノ上城跡		
17	大井谷城跡	37	欠ノ城跡	57	長谷寺上へ城跡		
18	半分城跡	38	大井城跡	58	峯寺山城砦跡群		
19	権現山城跡	39	湯谷城跡	59	要害城跡		
20	姉山城跡	40	大倉城跡	60	畠ノ内城跡		

表1 周辺の中世城館跡一覧

図1 周辺の中世城館跡 (1 : 100,000)



第3章 調査の結果

調査の概要

今回の調査地は、標高54mから62mの比較的起伏の緩やかな丘陵尾根上の約1,200m²である。調査前の地形観察においても、郭と考えられる平坦面や、尾根を分断する堀切と思われる落ち込みが容易に確認できたため、当初からこの遺跡が中世山城跡であることを想定して平成16年(2004)7月23日に現地調査に着手した。

まず、丘陵東に隣接する上島排水機場からの進入路確保、調査道具搬入、調査地草刈りなどを終えた後、基準杭の設置に取りかかった。尾根筋を概観した際ほぼN-25°-Wを指向していたため、この方向を調査区の主軸とし、平行方向にAラインからDラインを、直交方向に1から16ラインをいずれも5m間隔で設定し、交点に基準杭を設置した。これらの基準杭64本に「A1」から「D16」の名称を与え、区画される45のグリッド名については、最も若い杭の名称を用い「B7グリッド」と称することとした。なお、サブトレンチ設定のために任意の杭も必要に応じて設置している。

その後、平板実測で掘削前地形測量を行いつつ、あらかじめ土層堆積状況や地山標高を把握すべく、測量済み箇所から隨時尾根筋中央にサブトレンチを掘削した。このサブトレンチは基本的にBラインに沿うが、最頂部付近では尾根筋とBラインにズレが生じるため、尾根筋にあわせてサブトレンチを掘削している。この結果、主となるサブトレンチはa2-B6-B16ライン沿いに設定している。

サブトレンチで土層の堆積を観察したところ、まず、10cm～50cm堆積する第1層である表土が確認できた。その下位には部分的に第2層が認められるものの、広範囲が地山となっていた。

よって、1ラインから16ラインに向かい順次地山まで人力により掘削を行った。地山までの掘削が済むとグリッド毎に遺構検出を行った。その結果、土坑やピットなどを検出したため、これらについて実測及び写真撮影により隨時記録していく。

現地調査の最中、9月12日には山根正明氏を調査指導者として迎え、特に調査地外への縄張り確認に重点を置き周辺の踏査を行った。この結果、調査地の尾根以外に縄張りが広がらない点、畠ノ前遺跡が陣城として機能していたと考えられる点、堀切に土橋がある可能性が高い点についてご教示頂いた。また、9月28日には島根県教育委員会職員を迎えて、調査状況の確認や以後の調査方法についての指導を受けた。

調査の終盤では掘削後の地形測量を平板実測で進め、また、完掘後にはラジコンヘリでの空中写真撮影を株式会社大陸設計に委託して実施した。こうして、平成16年(2004)10月27日に現地調査を終了し、10月30日に現地説明会を開催したところ、約30名の参加者が集まった。

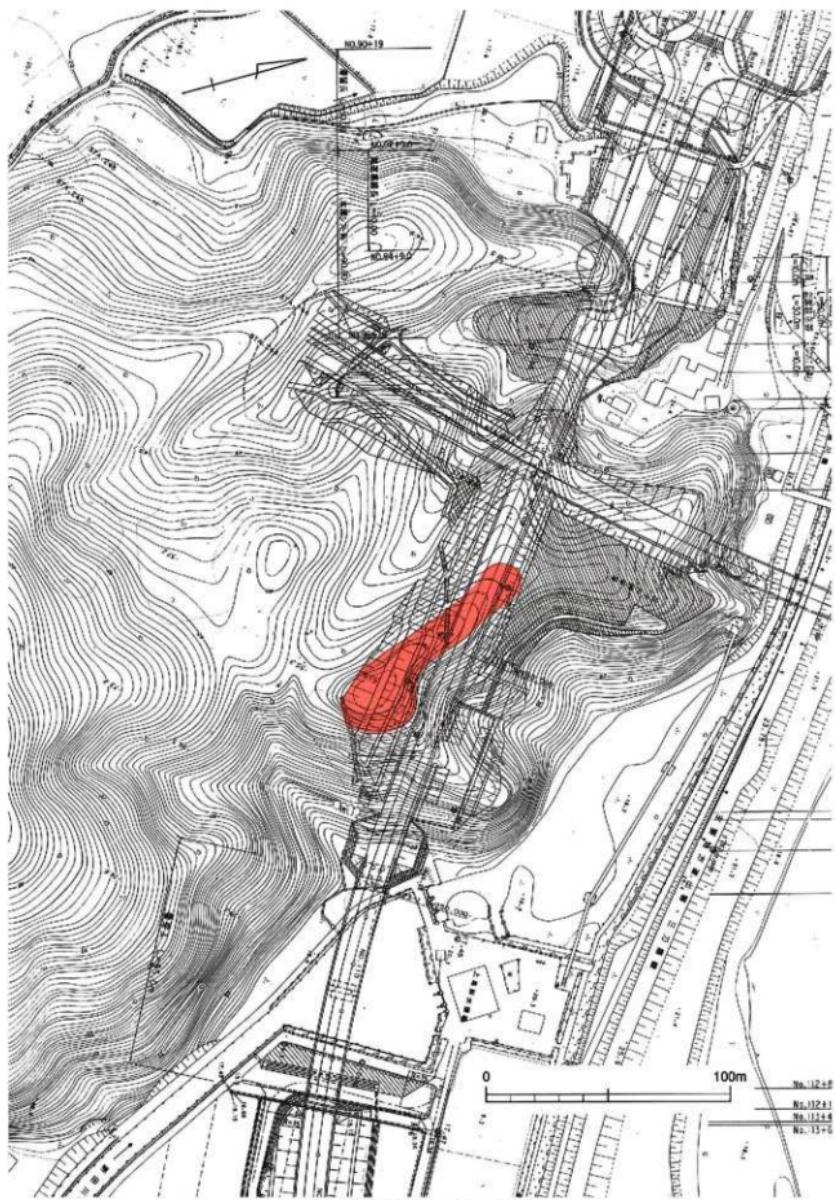


図2 調査地位置図 (1 : 2,000)

調査の成果

層序(図3～図6)

調査地は山塊から北西に派生する丘陵先端部で標高54mから62mの尾根上である。この尾根は南東に標高62.2mのピークがあり、北西方向に徐々に54mまで標高を下げている。また、標高61mから58mの範囲では中程を堀切で分断されてはいるが、勾配は特に緩やかである。一方、尾根筋を形成する斜面、つまり、南西と北東の斜面はいずれも急勾配となっている。調査地は当初から中世山城と認識されていた。したがって、層序の確認にあたってはこの尾根の形状が人工的に加工して築かれたもののかどうかが明らかになるように取り組むこととした。

調査着手時、この尾根の伐木は完了していたが、草が繁茂している状態であった。よって、草刈りを行ってから尾根筋を軸として基準杭を設置した後に、尾根軸とこれに直交するラインにサブトレインチを掘削し土層観察を行った。その結果、第1層である表土の堆積が10cmから50cm認められたが、尾根全体を覆う第2層は存在せず、表土直下に地山が確認できた。部分的に地山に落ち込む遺構ではない層も確認できたが、これらは動植物による擾乱と考えられものであった。つまり、基本層序は山の基盤層を表土である風化層が覆うという単純なものであった。

中世山城の普請では郭や切岸を盛土や切土によって築き上げるが、層序確認でそのような痕跡を残す箇所はなかった。よって、堀切以外は自然地形をそのまま山城として利用していると考えられる。

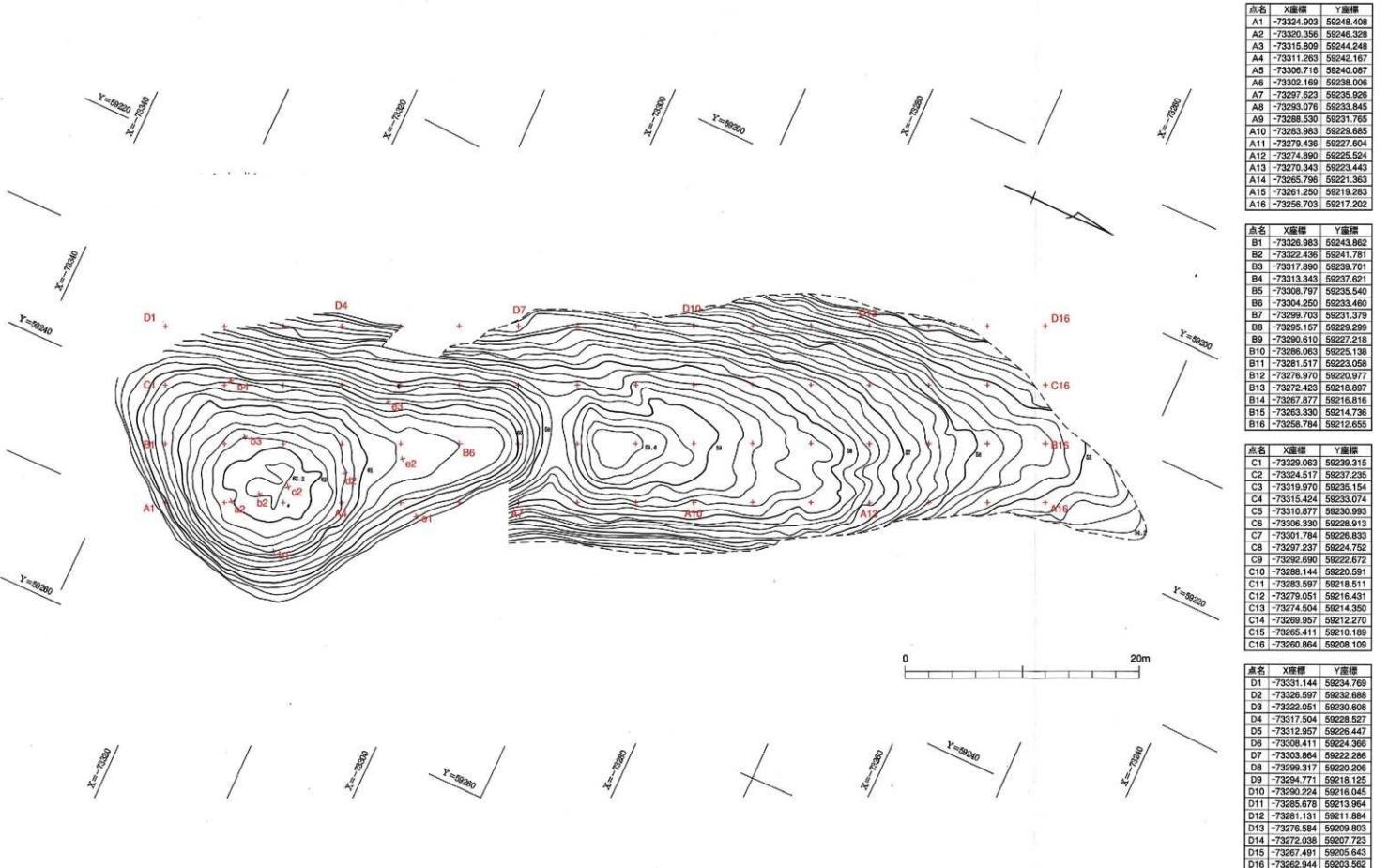
検出遺構

堀切(図7)

尾根の中央やや南東寄りの7grで堀切を検出した。調査の結果、長さは約16mを測り、上幅は3m前後、下幅は北東で2m、南西で1mの検出規模であった。しかし、この値は現存する掘削痕を実測したものであり、特に上幅は普請時の規模とは異なると考えられる。次に、底の形状は丁寧に平坦に仕上げられており、中央北東寄りには側壁際で径33cm、深さ26cmのビットを1基検出している。また、側壁は底から南東壁で標高58.35mまでが、北西壁では標高58.65mまでがそれぞれ急勾配であるため、掘削されたことが明らかであるが、それより上位はどちらも緩やかな勾配となっている。これは堀切が埋まる過程で肩が崩れた可能性と、普請当時から現状に近い形に仕上がられた可能性の2つが考えられる。これらから普請時の上幅の規模を想定すると、前者で4m、後者で7mとなる。

また、この堀切は監視対象が斐伊川側であることが明らかにため、北東方向を意識して築かれたものと考えてよい。実際、北東方向から山城を見上げると横に長い尾根の中央付近にこの堀切が見え、防御設備の整備を訴えかけている。この場合、死角となる南西方向を完全に掘削せず動線として土橋を残す場合があるが、調査の結果、土橋はなかった。

この堀切の断面確認はBラインと7ラインで行った。いずれも下層で自然堆積と考えられる薄い堆積が確認できた。また、Bラインの1層と2層は掘り返された痕跡と考えられ、2層の底に堆積する3層には炭化物が多く含まれていた。さらに、7ラインの1層には地山の赤褐色岩が碎けた様な礫が多く混在しているため、堀切を掘削して生じた土を盛土して堀切の肩を整えたものが、後に崩れ落ちた可能性が考えられる。なお、この遺構からの出土遺物はなかった。



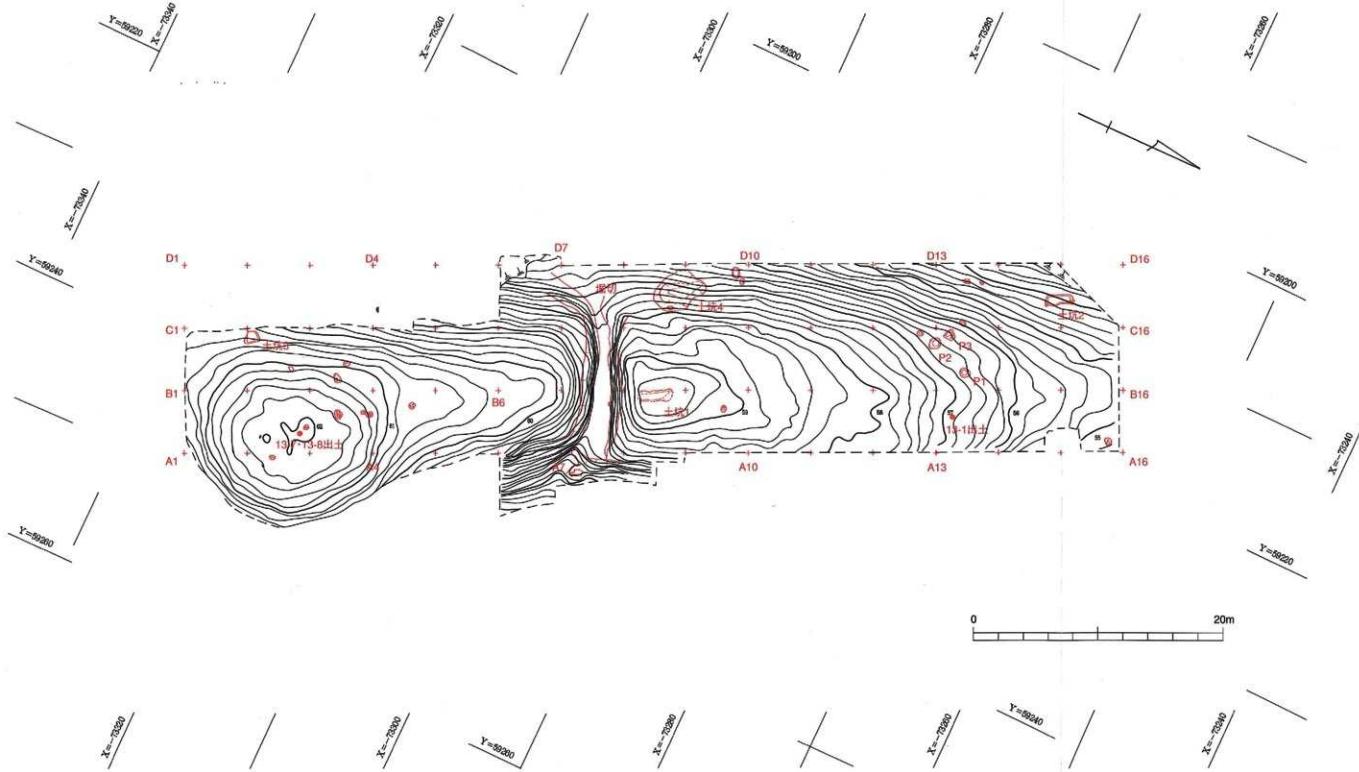


図4 造構配置図 (1:300)

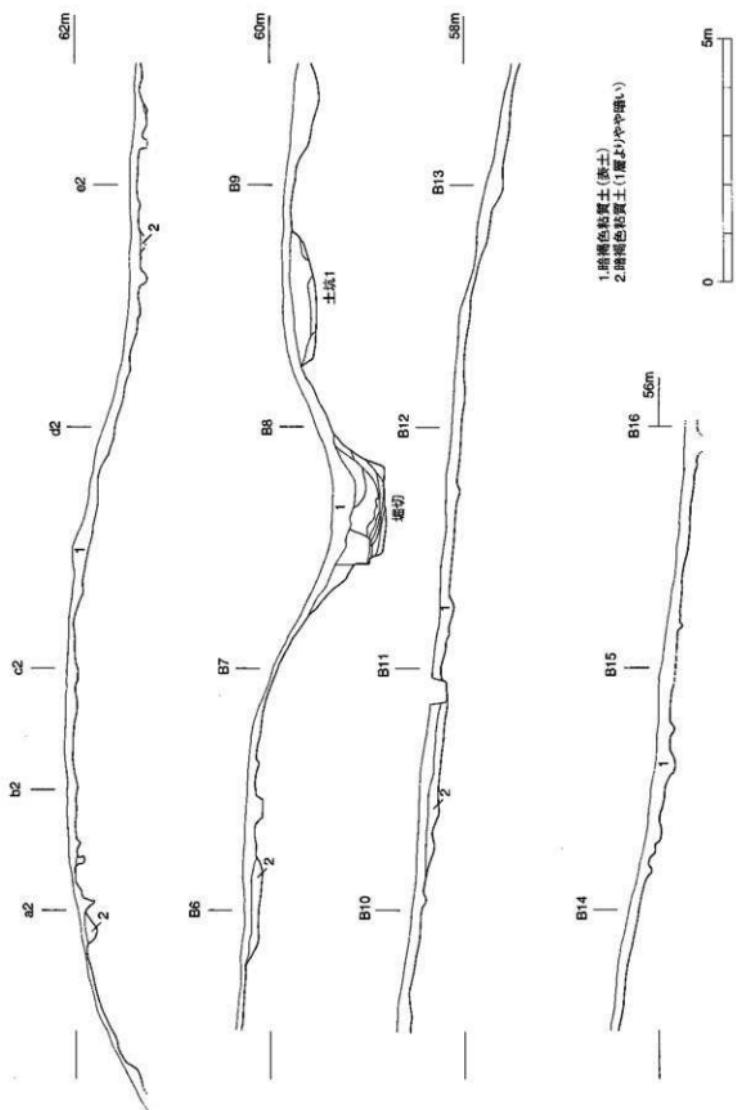


図5 a2-B6B16ライン断面図 (1 : 100)

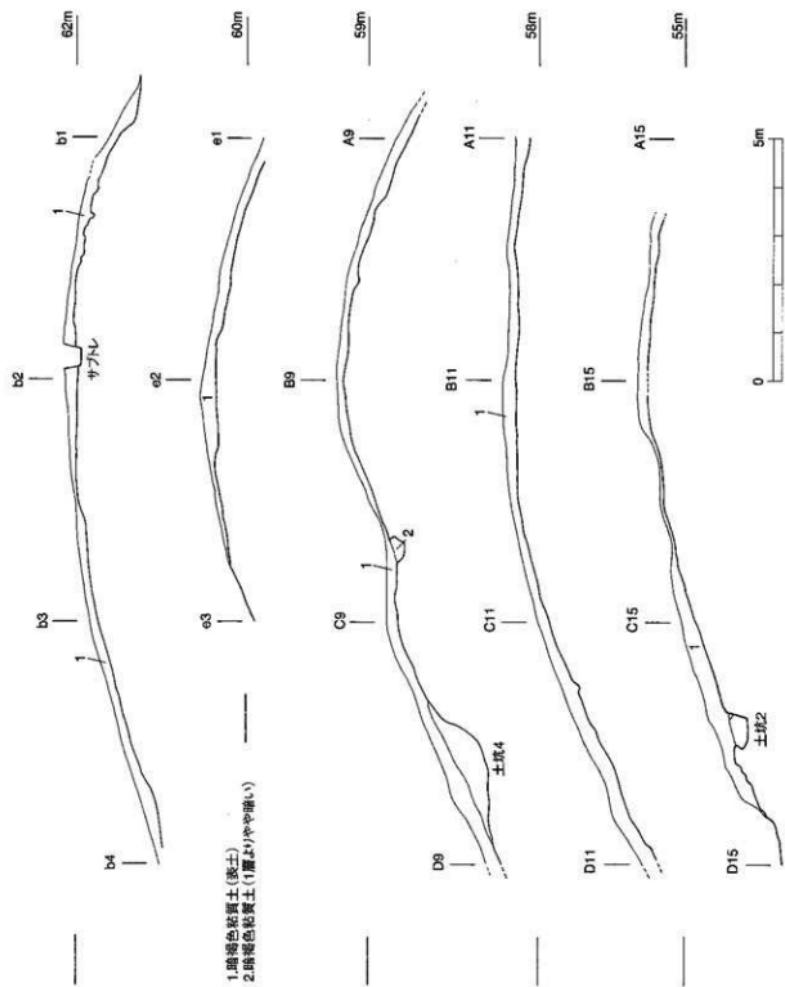


図6 尾根軸横断ライン断面図 (1:100)

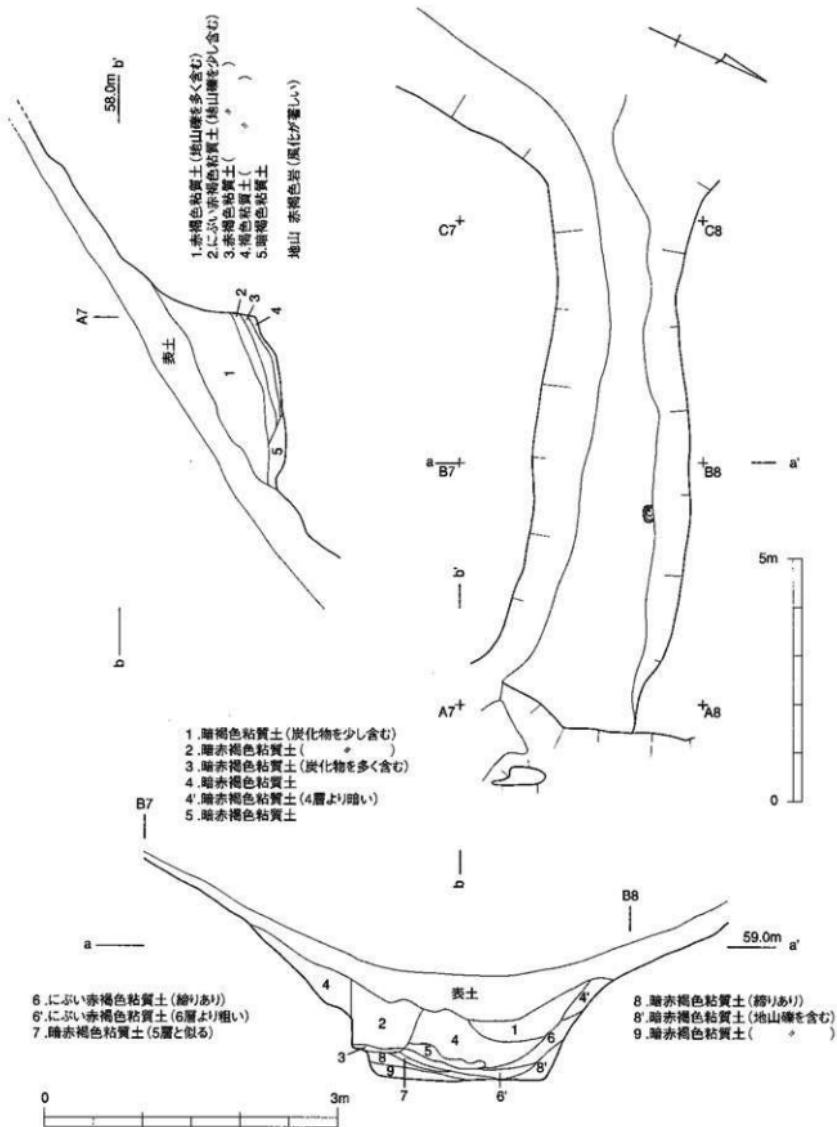


図7 堀切実測図 (1:100・1:50)

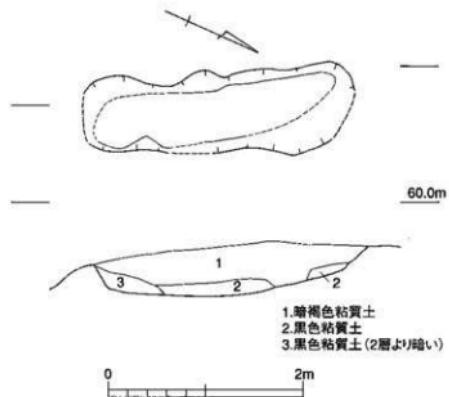


図8 土坑1実測図 (1:50)

土坑1 (図8)

調査地のほぼ中央にあたるB8-B9ライン際、標高59.35m～59.55mの地山面で土坑1を検出した。平面形はN-30°-W方向に長い不整な長方形を呈しており、検出規模は長さ280cm、幅80cm前後、深さ50cmを測る。この遺構は北西尾根のピークに位置していたため、古墳の主体部である可能性も考えたが、精査の結果、遺構の北西側に周溝が存在しないこと、堀切との位置関係を勘案し、堀切掘削後に築かれた可能性が高いことなどから、単体の土坑として取り扱っている。

この遺構の覆土は3層確認できたが、ここからの出土遺物はなかった。よって、時期や性格については推測の域を出ないが、中世以降の墓坑と思われる。

土坑2 (図9)

調査地の北西隅付近であるC15-D15ライン際の標高53.85m～54.18mの地山面で土坑2を検出した。尾根を形成する概して急な南西斜面の範囲でも、比較的緩やかな勾配の箇所に築かれた遺構である。

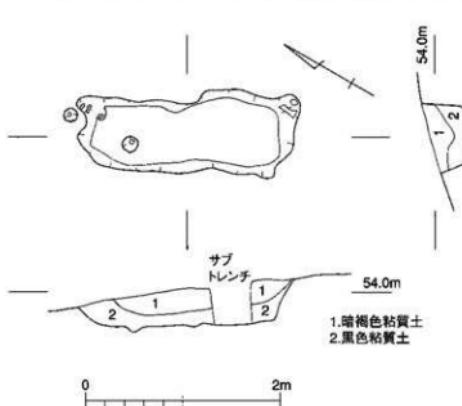


図9 土坑2実測図 (1:50)

平面形はN-30°-W方向に長い不整な長方形を呈しており、検出規模は長さ223cm、幅70cm～86cm、深さ43cmである。底の形状は小さな窪みを有するものの、概観すると平坦に仕上げられている。また、側壁の立ち上がりは、北西壁でやや緩やかであるが、その他は垂直に近い勾配である。

覆土は2層確認できたが、ここから遺物は出土しなかったため、遺構の時期は不明である。しかし、山道の脇に位置している点や検出規模・形状などから、遺構の性格としては、土坑1と同様に墓坑が考えられよう。

土坑3（図10）

調査地の南東端付近にあたるB2grの標高60.28m～60.24mの地表面で土坑3を検出した。平面形は隅丸の台形を呈しており、検出規模は長辺110cm、短辺60cm、幅90cm、深さ15cmであった。底の形状は斜面に平行して一定の深さで滑らかに掘削されており、側壁はいずれも緩い勾配で立ち上がっている。

覆土は1層確認しており、ここから出土遺物はなかったため、遺構の時期は不明である。しかし、底には薄く密に炭が残っていた。また、この遺構の位置が尾根のピークの南西斜面上と風よけを考慮していると思われることから、目的は不明であるものの、火を使用していた痕跡と考えられる。

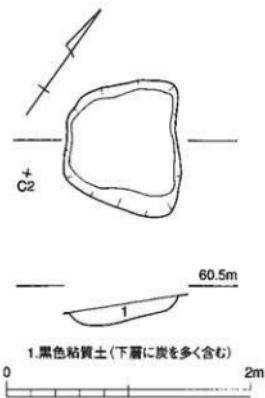


図10 土坑3実測図 (1:40)

土坑4（図11）

調査地の中央南西寄りにあたるC8grからC9grにかけての地表面で土坑4を確認した。斜面であるため検出標高は56.40mから57.75mにわたっている。平面形はN-36°-W方向に長軸をとる歪な橢円形を呈しており、検出規模は長径425cm、短径295cm、検出面からの深さは60cmと比較的大型の遺構である。構底の規模は長さ277cm、幅50cm～95cmを測り、検出面での平面規模と比較し小規模に収束している。側壁の立ち上がりは緩やかで、中程では勾配をさらに緩くしている箇所も認められる。

この遺構の覆土は1層のみ確認しているが、ここから出土遺物は全くなかった。したがって、この遺構の時期や性格は不明である。

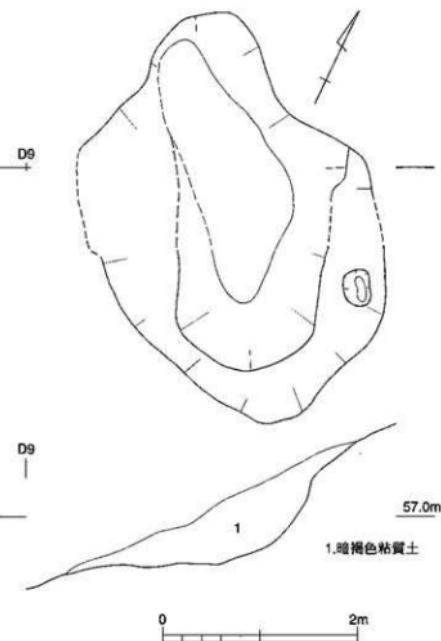


図11 土坑4実測図 (1:50)

ピット（図4・図12）

今回の調査では20基余りのピットを検出している。中世山城を想定した場合、門や櫓、堀切の橋、小屋などの構造物の痕跡がピットとして残っている可能性が考えられたため、地山面で精査を行いこれらの検出に努めたが、結果として規則的に並ぶものではなく、規模や深さも不揃いであった。よって、比較的しっかりとP1～P3のみを報告するにとどめる。

P1～P3はB12grの標高56.7m前後の地山面で検出した。特にP1とP2は検出時、平面規模や覆土が酷似していたため、同時期の遺構として捉えた。両者の検出規模は径80cm前後の円形を呈しており、深さはP1が10cm、P2が22cmであった。約2.5mの間隔をあけて並んでおり、周囲に類似するP3が存在するものの、位置関係から先の構造物の痕跡ではないと思われる。また、いずれのピットからも出土遺物がないため、時期についても不明である。

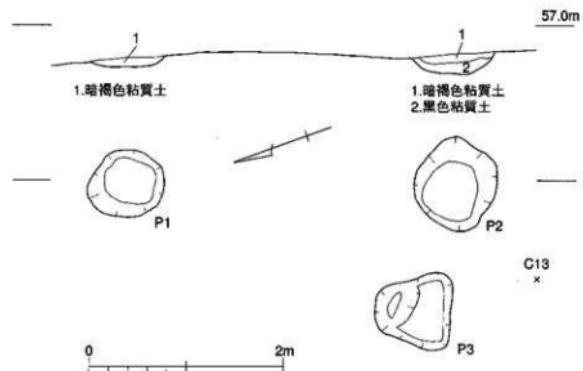


図12 P1～P3実測図 (1:50)

出土遺物（図4・図13）

今回の調査で出土した総遺物量はビニール袋で2袋分と非常に少ない。これらは土師器、須恵器、中世土師器の破片であり、いずれも遺構外の表土中からの出土となっている。これら出土遺物のうち、図化に堪えるものを13-1～13-8に取り上げた。

13-1は古墳時代初頭の土師器の壺であり、今回の出土遺物の中では最も古いものである。この土器はA13grで、口縁部を下にして胴部を欠いた状態で単体で出土している。何らかの祭祀に用いられた可能性も考えられる。13-2・13-3は奈良時代頃の須恵器の蓋である。いずれもつまみが付くようである。13-4～13-6は奈良時代頃の須恵器の壺身と考えられ、13-6には低い高台が貼り付けられている。13-7・13-8は中世土師器の壺身であり、両者とも尾根のピークであるA2grで40cmの間隔をあけて、伏せられた状態で出土していることから、祭祀に用いられたと考えられる。

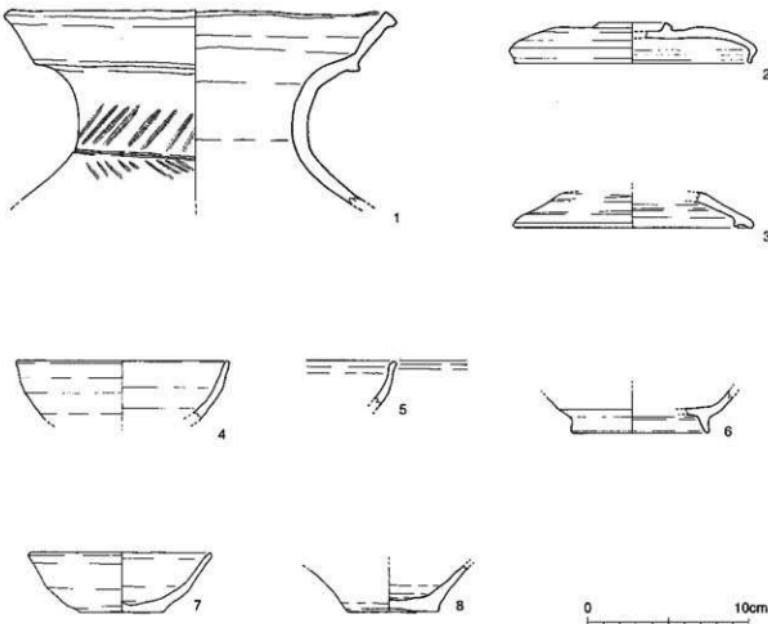


図13 出土遺物実測図 (1:3)

博物番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態・文様の特徴	主な調整	①胎土 ②焼成 ③色調	備考
13-1	土師器 壺	A12gr 表土	口径 23.4	口縁部に質を持つ。複合部の後は斜め下方。腹部に模様文。古墳時代 初期。	口縁部 内外面：ナデ 複合部以下 内面：ケズリ？	①5mm の砂粒を多く含む ②普通 ③にい青灰色	表面風化。
13-2	瓶	B1gr 表土	口径 14.7	口縁部は内側する。輪状捲を貼り付ける。奈良時代頃。	口縁部 内外面：回転ナ デ 天井部 外面：ケズリ	①致密 ②良 ③灰色	反転復元。
13-3	瓶	C15gr 表土	口径 14.8	カエリは短く内板する。奈良時代頃。	口縁部 内外面：ナデ	①致密 ②良 ③黄灰色	反転復元。
13-4	瓶	B1gr 表土	口径 13.2	器壁は内側して立ち上がり開口する。奈良時代頃。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ	①致密 ②良 ③黄灰色	反転復元。
13-5	瓶	B5gr 表土	不 明	器壁は内側して立ち上がり、端部で外傾して開口する。奈良時代頃。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ	①致密 ②良 ③黄灰色	
13-6	瓶	C1-B1 表土	高台径 8.3	底面外縁に低い高台を貼り付ける。奈良時代頃。	高台 外面：ナデ	①致密 ②良 ③灰色	反転復元。
13-7	中腹土師器 壺	A2gr 表土	口径 11.1 底径 5.0 高さ 3.7	底部でやや膨らめた器壁は体部で内折し端部附近で外傾気味に開口する。 中腹。	口縁部・体部 内外面：ナデ? 底部 外面：回転糸切り	①3mm 以下の砂粒を少し 含む ②普通 ③褐色	ほぼ完形に復元。
13-8	中腹土師器 壺	A2gr 表土	底径 5.5	底部でやや膨らめた器壁は体部へ外 傾気味に立ち上がる。中腹。	体部 内外面：ナデ? 底部 外面：回転糸切り?	①1mm 以下の砂粒を含む ②やや不良 ③黄灰色	口縫繩付近欠損。

表2 出土遺物観察表

第4章 まとめ

今回の調査地である畠ノ前遺跡は山塊から斐伊川左岸にせり出した丘陵の尾根上、標高54mから62mに位置している。調査地からは斐伊川の眺望が良いほか、仏経山山頂も望める。

調査の結果、堀切や土坑、ピットなどの遺構のほか、古墳時代初頭の土師器や奈良時代頃の須恵器、中世土師器などの遺物も僅かながら出土した。

検出した土坑の中にはその形状や規模から墓坑の可能性が考えられるものもあったが、20基あまり検出したピットは規則的に並ぶものがなくため性格は明らかでない。

また、遺物はいずれも表土中の出土であったが、二つの中世土師器が尾根のピークで伏せた状態で出土するなど、祭祀で用いられた可能性を示すものもあった。

出土遺物からは少なくとも古墳時代初めから人が関与していたことが窺えるが、それ以後、畠ノ前遺跡は主に中世山城として活用されていたようである。

層序の確認から、人工的にこの尾根を加工した痕跡はほとんど見あたらず、自然地形を改変せずにそのまま山城として用いたようである。調査の結果、山城に関する検出遺構は堀のみであり、切岸や柵跡、建物跡などは確認できなかった。

また、周辺の現地踏査¹⁾でも、山城に関連する施設の確認には至らず、柵張りが調査地以外に広がらないことが判明した。つまり、簡単な城誘で、かつ、人が長期滞在した様子もないことから、この山城は緊急時など一時的に利用される陣城としての役割を担っていたと考えられる。

畠ノ前遺跡の1.5km南東には上之郷城跡が、3km北西には瀧谷山城跡がいずれも斐伊川沿いに位置している。これらが同時期に存在していたという根拠はないが、位置関係から連携して斐伊川側の監視をしていた可能性はある。その場合、上之郷城跡が根城、瀧谷山城跡が支城として機能していたと思われる。

註

1) 島根県教育委員会 久保田一郎氏のご教示による。

2) 瀧谷山城跡では堀切を監視対象方向のみ完掘し、光角側を動線のため土橋として残す例がある。

3) 調査中の平成16年9月12日に山根正明氏、川上稔、三原で実施した。

参考文献

島根県教育委員会『出雲・上塙治を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980

出雲市教育委員会『出雲市遺跡地図』1993

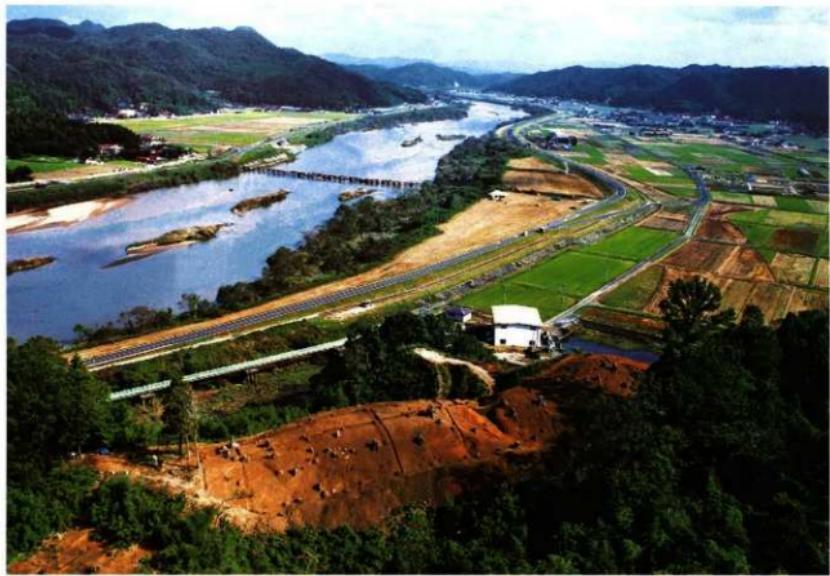
島根県教育委員会『島根県中近世城館跡分布調査報告書 第2集 出雲・隠岐の城館跡』1998

山根正明『第二章 中世の瀧陵町』『瀧陵町誌』瀧陵町誌編纂委員会 2000

出雲市教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書IV 瀧谷山城跡ほか』2003

写 真 図 版

畠ノ前遺跡



1 調査地全景(西から)



2 調査地全景(南東から)

図版2

烟ノ前遺跡



1 調査地全景(右が北)



2 調査完了状況

烟ノ前遺跡



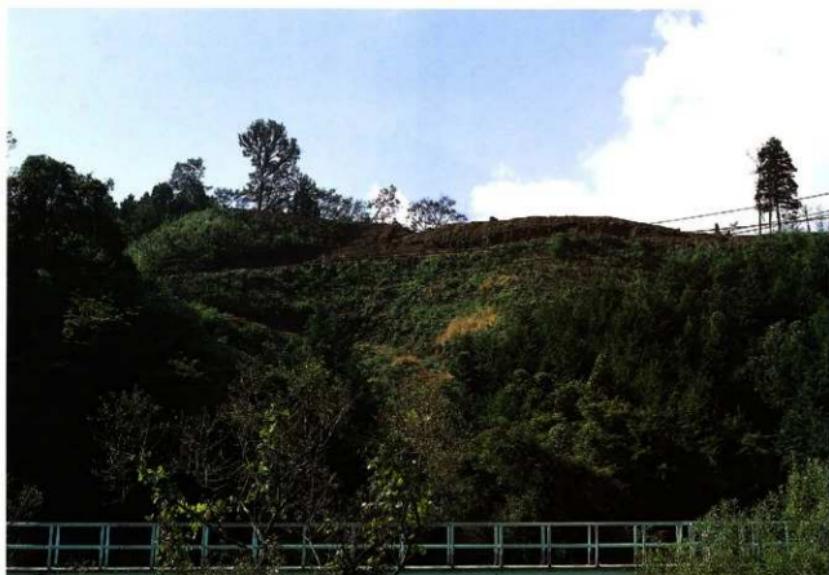
1 調査完了状況(中央から南東を望む)



2 調査完了状況(中央から北西を望む)

図版 4

畠ノ前遺跡

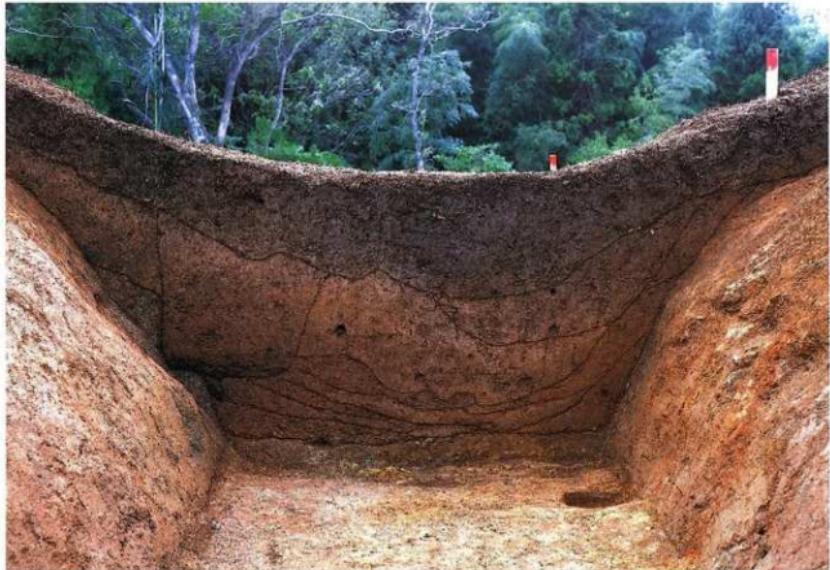


1 調査地全景(斐伊川から望む)



2 仏経山(調査地から望む)

畠ノ前遺跡



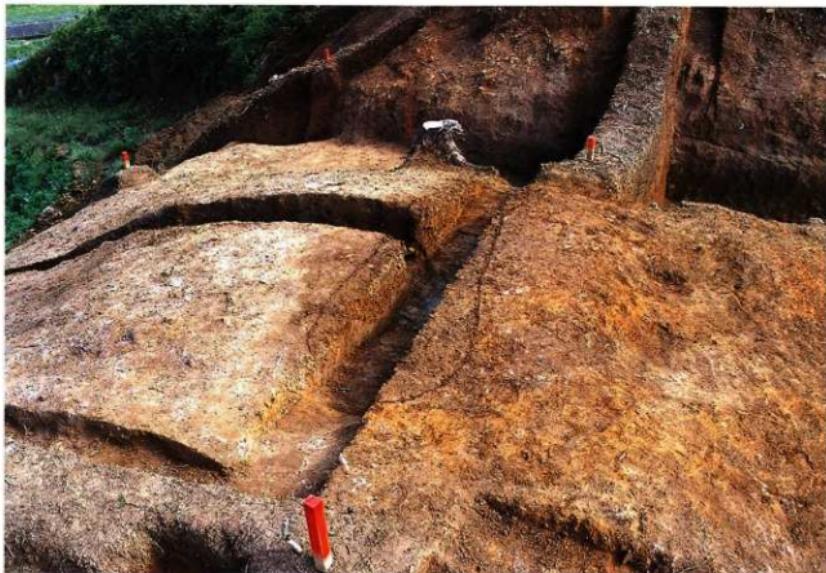
1 堀切断面(東から)



2 堀切断面(西から)

図版 6

畠ノ前遺跡



1 土坑 1 調査状況(西から)



2 土坑 1 完掘状況(北西から)

畠ノ前遺跡



1 調査前状況(中央から南東を望む)



2 調査前状況(中央から北西を望む)

図版 8

烟ノ前遺跡



1 土坑2調査状況(北西から)



2 土坑2完掘状況(北西から)

烟ノ前遺跡



1 土坑 3 完掘状況(南東から)



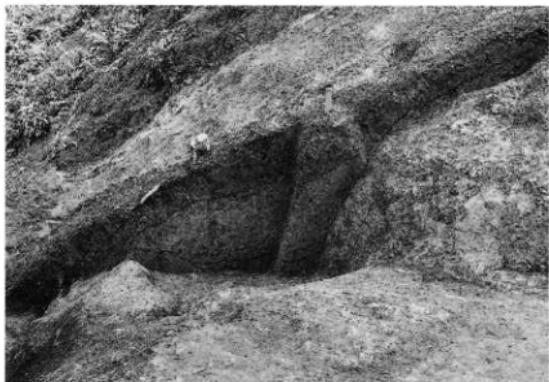
2 土坑 4 調査状況(北から)



3 B13gr ピット完掘状況
(南東から)

図版 10

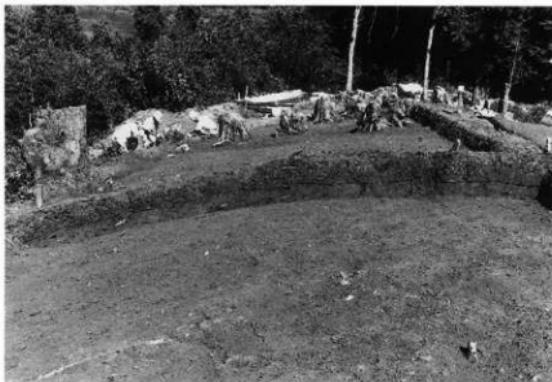
烟ノ前遺跡



1 B7-A7 ライン断面
(北西から)



2 B9-C9 ライン断面
(東から)



3 B11-C12 ライン断面
(南東から)

烟ノ前遺跡



1 13-1 出土状況(北から)

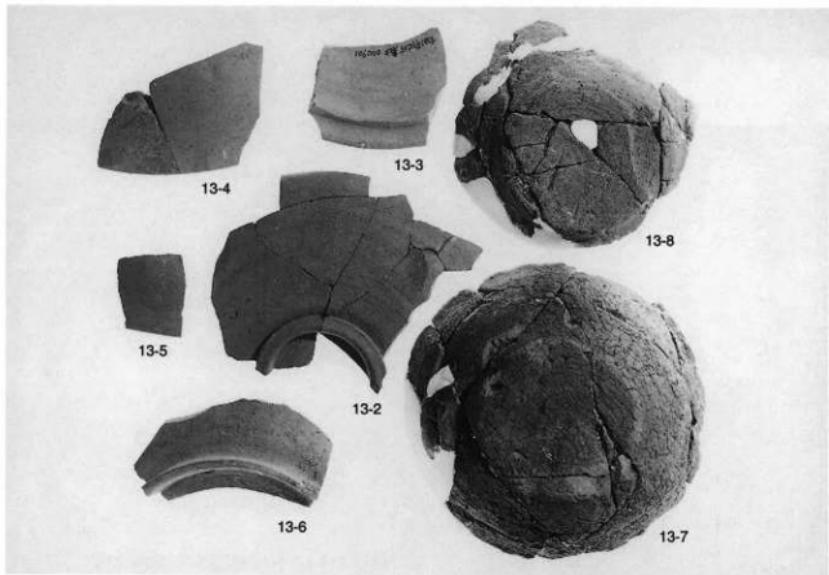


2 13-7・13-8 出土状況(東から)

畠ノ前遺跡



1 出土遺物(13-1)



2 出土遺物(13-2～13-8)

報告書抄録

ふりがな	はたのまえいせき
書名	畠ノ前遺跡
副書名	主要地方道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編集者名	三原一将
編集機関	出雲市教育委員会
所在地	〒693-8531島根県出雲市今市町109番地1 TEL0853-23-3636
発行年月日	西暦2006年1月

所収遺跡名	所在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畠ノ前遺跡	島根県 出雲市 上島町 1994-2他	32203 <small>(島根県地図)</small>	W236	35度 20分 13秒 ~ 19秒	132度 49分 03秒 ~ 07秒	2004.07 ~ 2004.10	1,200m ²	主要地方 道出雲三 刀屋線改 良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項
畠ノ前遺跡	山城跡	中世	堀切	土師器 須恵器	付近の上之郷城跡 と瀧谷山城跡と関係する可能性がある。

要約	斐伊川左岸の標高54mから62mの尾根上に位置する畠ノ前遺跡は、主に中世山城として機能していたようである。縄張りが調査地以外に広がらず、簡単な城誘で人が長期滞在した様子もないことから、陣城としての役割を担っていたと考えられる。
----	---

主要地方道出雲三刀屋線改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

はた の まえ い せき
畠ノ前遺跡

2006年1月

◆編集・発行◆

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

◆印 刷◆

綜合印刷㈱

出雲市高岡町 647-1